

プレスリリース

日本初の英語によるケース・コンペティション「JMBACC」、この11月に東京開催

2013年9月、東京

日本初の英語によるビジネスケース・コンペティションが、2013年11月17日に東京で開催される。国内外のビジネススクール代表チームが経営戦略を競い合う本選は青山学院大学で行われ、その後、付近の会場で優勝チームの発表と交流会が予定されている。このイベントを実現すべく、今年2月から精力的に準備を進めてきたのは、青山学院大学、一橋大学大学院ICS（国際企業戦略研究科）、およびマギル大学国際経営学修士課程（MBA）日本プログラムから集った学生有志だ。

マギル大学のMBA生、ジミー・チュー氏はこう語る、「日本でまだ歴史の浅いMBAプログラムで学ぶ私たちは、他校との情報交換の場を求めています」。「当初はケース・コンペティションまでは考えておらず、各校の学生会が行うキャリア交流を支援することを目的にしていました。しかし、このような取り組みのなかで、ケース・コンペティションが私たちのクラスメイトやこの地域でMBA取得を目指す学生にとって、優れた人脈形成の機会になると考えました」。

では、チュー氏が述べる「この地域」とは、具体的にどこを指すのだろうか？学生有志による実行委員会は当初、参加対象を日本国内のMBA校としていたが、海外校から参加申し込みがあり、対象地域が一回り広がった。一橋大学のMBA生、アリエル・ダニエル氏は興奮を隠さない、「本当にワクワクしています。日本国外からの参加は予想しなかったのに、台湾のビジネススクールから航空券を予約したと連絡が入ったのです。国際色が自然に加わりました」。

マギル大学のMBA生、ライアル・クラフ氏はこう説明する。「初めての試みですから、当初は参加校を日本国内だけに絞ってシンプルに行こうと思っていました。コンペ開催のコツをもう少し掴んでから海外を視野に入れても遅くないと思ったのです。でも、せっかく海外から申し込みがあって、ノーといえるでしょうか？私たちが企画していることに需要があり、国境を越えて熱心に広めてくれる仲間がいることが分かったのです。これが実行委員会にとってどれだけの励みになったことか。」

それでは、ケース・コンペティションとはいったい何を競い合うのだろうか？青山学院大学のMBA生、イネス・バーリ氏が解説する。「基本的に、参加チームにはあるビジネスの事例（ケース）が与えられます。そこには、企業でとあるチャンスを目前にした上級管理職を務める主人公が登場します。参加チームは、主人公の視点に立ち、与えられた情報を分析しつつ、そのビジネスチャンスについて決断を下します。」

簡単な具体例を挙げると、例えば3つの市場のうちどこに新規参入すべきか主人公が悩んでいるとする。そこで、参加チームはまず、新市場に参入すべきか否か自体を判断することになる。参入を決めた場合、ケースの情報に基づき、どの市場が一番良いかを見極める。一方、参入しないと決めた場合にも、やはりケースの情報を使って、その理由を説明することになる。チームは、アクション・プランをまとめ上げ、どの段階でどの程度の投資をすべきか、誰が何をすべきかを詰めていく。チームが方針を固めると、次に待つのはプレゼンテーションだ。居並ぶ審査員の前で、自分たちのビジネス分析や提案を発表する。審査員たちは内容について掘り下げた質問を行い、応酬する。これがハーバードのMBAクラスで採用され、世界的に知られるケースメソッド方式である。

今回、JMBACCのケース・コンペティションが、首都圏のみならず京都からの参加や、国外では台湾からの参加を得たことから、イベント開催の背景で高まる大きな機運が感じられる。それはなぜか？そして、多忙を極めるビジネススクールの大学院生が一週間かけてケースに取り組み、さらに開催準備にはほぼ1年を費やしてきた原動力はどこにあるのか？マギル大学のMBA生、ポール・スピード氏は、開催に向けて複数の大学が共に取り組んできた理由を語る。

「多くのMBAトップ校がケース・コンペティションを開催するのは、自分たちの知名度を高めるためです。が、私たちの場合、事情が若干異なります。JMBACCのイベントは、複数大学の学生有志が企画運営しており、イベントの名称にも特定の大学名を冠していません。それでも、このケース・コンペティションにチームとして参加したり、実行委員会として活動することで、自分たちの大学の知名度向上に貢献することができるのです。」

「学生たちがケース・コンペティションに参加したがるのには理由があります。まず、参加自体が楽しい。そして、大抵は賞品も豪華です。でも、理由は他にもあります。こうしたイベントが絶好の人脈作りの場でもあるからです。また、審査員は通常、企業内で影響力を持つ人々であり、スポンサー企業もオブザーバーとして社員を送り込み、イベントに参加します。素晴らしいプレゼンテーションを

した参加者には企業から面接の誘いがきたり、採用通知さえも舞い込んだという話が多くあります。これが参加への大きなモチベーションになります。」

「この話のつながりで、私たちの最後のステークホルダーである審査員とスポンサーの視点をご紹介します。通常、企業人である彼らは、こうしたイベントに好んで参加します。というのも、多彩な才能が一堂に会して、ビジネス上の実際の課題を分析し、提案を行う様子を目の当たりにできるからです。学生たちのこうした姿からは就職面接よりもはるかに有益な情報が得られます。基本的に、有能な人材を発掘し、幹部候補生教育を支援するにはとても良い手段なのです。ビジネススクール同様、企業もこうしたイベントを支援することで自らの知名度を上げたいと考えています。」

実行委員会のメンバーは全員、こうしたイベントを開催することが日本のMBAプログラム全体のステータス向上、ひいては日本全体のビジネスに貢献すると話を続けた。「私たちのキャッチフレーズは、コンペティション（競争）、コミュニケーション（交流）、コラボレーション（協力）です」とメンバーは強調する。「ビジネスの成功は結局、人間の手で成し遂げられます。このようなイベントを通じて、人は出会い、つながります。目上の人や仲間を含めて、良質な人脈を形成することの重要性はどれだけ言っても言い過ぎることはありません。私たちは、このイベントから多くの成果が生まれると信じています。これまで大学や同級生、スポンサーから寄せられた多くのご支援を考えると、こう考えているのは私たちだけでないことがお分かりでしょう」。

本イベントの予選は一般公開されないが、本選と交流会は企業関係者および参加ビジネススクールの学生双方に開かれている。開催についての詳細は、JMBACC ホームページ(www.jmbacc.org)、またはEメール (info@jmbacc.org) で問い合わせを。

JMBACC（ジャパン・MBAケース・コンペティション）の概要：

今年、日本初開催となる英語によるケース・コンペティション。創設メンバーは、マギル大学MBAプログラムのジミー・チュー、ライアル・クラフ、ポール・スピード、青山学院大学のイネス・バリ、および一橋大学大学院ICS（国際企業戦略研究科）のアリエル・ダニエルの5人。発足以来、実行委員会のメンバーは10人に拡大。現在エントリーしているのは8大学11チーム。実行委員会は7業界からスポンサーを得て、5業界から審査委員を招致した。このプレスリリースに関する詳細は、文責者アリエル・ダニエルまで。

アリエル・ダニエル連絡先：

100096 中華人民共和国

北京市昌平区

回龙观

吉晟別墅 9 号楼 04 戸

+86-158-1093-3903

im12b003@g.hit-u.ac.jp